

聖なる美は  
時空を超えて

マトフェイト田定克



ここに『みちびきの星』及び『わたしが十字架になります』につづく第三弾『恋人たちの夜明け』が上梓されたことを言祝ぎたい。第一弾は、クリスマスの題材の奥に読みとれる世界を生き生きと描き出した作品。第二弾は、動植物はじめ全受造物が神人の奇蹟に触れたときの思いを刻み込んだような作品。そして第三弾は、この一瞬にやどる永遠の美を見つめ、造物主を讃えたくなるような作品に仕上がっている。いずれも七〜八つほどの小品集で、キリスト教の二大祭日（降誕祭と復活祭）の間をこだましながら、信じて生きることの喜びをやさしく伝えていく。だれもが陥りがちな不信や思い悩みを共同体験しながら、そのシーンに見合う名言が飛び出してくる。あちこちに古風な言い回しが散りばめられ、しとやかな語調に花を添えている。三冊とも朗読にふさわしい文体で、響きとしても構成としても音楽的に美しい。

シリーズ第三弾である『恋人たちの夜明け』は、時空を超えて展開する「ひとつのこ」とがその主題である。その時代、その土地にしかない条件の中で、人々がどのように生きてきたか。それらに一貫するものは何か。ときおり人々を導く「みちびきの星」がシリーズのライトモチーフ（主導動機）のごとく現れて来世をほのめかす。はてはこの小品集こそ、漠然とした不安感を抱えている現代人にとって行く手を照らすみちびきの星となりうるのではないか。それは小さくても遠くから人々を招く穏やかな光。本シリーズは信じることを忘れがちな私たちに、真に持つべきものと行くべき方向を示していると言えるだろう。

「星降る大地」は、今から二千年前、イエスの直弟子ヤコブを主人公とし、ユーラシア大陸最西端のイスパニア（スペイン）でのお話である。帆船で運ばれる聖使徒ヤコブのご遺体は、目的地へ着くまで天国を象るような自然描写で彩られ、その墓地一帯が「星降る大地」と呼ばれるようになった由来を解き明かす。あたかも前奏曲のようにすっと読者を惹きつけつつ、本書の副主題である「致命（殉教）による勝利」という生き方にも触れている。

「くつしたの贈りもの」は、サンタクロースの由来であるミラ・リキヤの大主教奇蹟者聖ニコライ（二七〇頃～三五二）にまつわる三～四世紀の物語である。なぜ赤い靴下にクリスマスプレゼントを入れる習慣になったかという点では、おもしろい解釈を示している。結婚式や降誕祭という明るい祭日を主軸に置き、主教と信徒との心温まる絆が描かれている。

つづく「恋人たちの夜明け」も三世紀の義人の話であり、ローマ軍とゴート族の戦場が舞台となる。軍医ラウレンティウスは復活祭の夜明けに受洗を決意したものの、最初のうちは捕虜を治療したり敵に授洗したりする行為に激しい抵抗を覚える。やがて献身的な助手ニコルとめでたく結婚して司祭となるが、あいにくキリスト教迫害の時代のため、降誕祭の夜明けに自ら致命（殉教）に赴くこととなる。最後は無数のヤリの穂先に照り返る朝陽を浴びながら、永遠の生命への確信のうちに幕を閉じる。廉施者・致命者聖バレンタイン（？～二六九頃）の生涯が元となっている。

まぎれもなく御旨にしたがって生きるとはどういうことを示した物語が、つづく「とらわれびとのクリスマスツリー」である。ここでは三世紀後半、ブリタニア（イギリス）の敬虔な少年の壮絶な半生を描き上げている。海賊に売られ奴隷にされた当初は復讐心を抱いたものの、最後は「生きる場所の問題ではない……：奴隷であることが問題なのではない、じぶんの生き方だ、そう思えるようになりました」という名台詞が光を放っている傑作。サロフの聖セラフィムが「己の霊を鎮めよ、されば爾の周りの人々は救はれん」（訳ニコライ高松光一）と諭したとおり、こういう人をとおして周囲の人々も変わる。アイルランドの使徒聖パトリキウス（三八七？～四六一）を元とした物語である。

一転して「きらめく聖歌」は五～六世紀、コンスタンティノープルの聖ソフィア大聖堂での逸話である。主人公のロマンは、主の降誕祭のイコンの前で回心したのち、生神女から「人のことばではなく、神のことばによって生き」なさいという祝福を受ける。本当の祈りとは何か、を考えさせられる佳作である。コンスタンティノープルの名聖歌作者聖ロマン（四九〇～五五六）の生涯が元となっている。

「クリスマスツリー聖 樹 伝説」は、八世紀ゲルマニア（ドイツ）のヘッセン地方にて、キリスト教を嫌う異教徒に対して真の信仰が勝利するさまを描いている。ドイツの使徒聖ボニファティウス（六七五〜七五四）が姿を見せ、異教徒に「祝福されし大地に、悪しきものはない」と告げる。そして救世主に祈りを献じるや、それまで悪用されてきた木がクリスマスツリー聖 樹へと変容するところが見ものである。修道女リオバも実在の人物で、聖ボニファティウスの弟子であった。

このような「異教徒への布教」というテーマを受け継いで、「オーロラに照らされて」にて本書のクライマックスを迎える。舞台は十九世紀ロシア、北米の亜使徒アラスカの聖インノケンティ（一七九七〜一八七九）の生き様が刻々と描かれる。ここで主人公は厳寒の大地で見たオーロラをとおして神と出会う。逆境を越えて、神の偉大さを目のあたりにしたときの感激であろうか。氷のクレバス（深い裂け目）を慎重に避けながら、流水の上を犬ぞりで物怖じせず渡っていくさまは圧巻。注目すべきは、史実どおり日本のあしと亜使徒聖ニコライ（一八三六〜一九一三）と出会う点である。つまり本書をとおして、わ

たしたちはキリストの福音が二千年の時を経て極西から極東まで宣べ伝えられたことを実感できるのだ。壮大なロマンというほかない。若き聖ニコライが不安を口にしたとき、聖インノケンティはアライド雪嵐の後に見たオーロラを思い出しながら、「苦難の旅が、凄絶な光景が、わたしをささえてくれます」と言う。なぜなら人は苦難をとおして神に出会い、受難して復活されたキリストを体験するからであろう。そのような「神との出会いを大切に下さい」と……。きつとこの行を読んでくださっている方々も、もちろん文字どおりのオーロラではなくとも、どことなくそれと似たような神妙な体験をされたことはあるのではなからうか。

このように、本作品は史実に基づく聖人伝を素材とし、その背景にあったと思われる出来事や心の動きを色鮮やかに描きながら、信仰のありかを問うことに成功している。読者はそのリアルな空間にのまれ、その場にただよう匂いを嗅ぎ、登場人物の吐息を耳にしながら「信じること」と「迷うこと」の間を行き来する。これほど心に迫りくる聖

人伝もあるまい。本書を飾る『恋人たちの夜明け』という表題は、今年六十五歳になれる神父が「瑞々みずみずしい感性を失いたくない」という思いで付けられた題名である。裏を返せば「人は愛し合うことで心の闇が晴れる」というメッセージではなからうか。だとしたら、むやみに敵意や不安を煽りたててくる現代の情報社会において、これ以上に必要なメッセージもあるまい。本シリーズは、ほどなく第四弾『イースター小品集2』も上梓される予定であるという。またひとつ、みちびきの星が本邦の出版界に灯るかもしれないと思うと、わくわくせずにはいられない。

岩手出身の童話作家といえば仏教徒の宮沢賢治。同じく岩手出身の正教徒の童話作家といえばパウエル及川信神父である。神父様の前途に主のご加護が豊かにあらんことを心より祈りつつ――。

ハリストス 復活！

令和六年五月五日 主の復活祭に 仙台にて

あとかぎ

